

## キリスト道講演会

## キリストに在る希望

——輝く人生を生きる!——

2014年4月19日(奈良 春日野荘)

ペテロの手紙を味わう 生き生きとした希望 キリストの力が我々を変貌せしめる 魂の救い キリストはまばゆい御姿に変貌 神の子にふさわしい生活 伝道という役目 キリストと同じ次元に 自分捜しの旅 霊の賜物 主の来臨の約束 聖霊のバプテスマ 十字架と聖霊 キリストがお手本 キリストと共に復活 いつのまにかキリストに感染 祈り

## ペテロの手紙を味わう

皆さん、よくおいでくださいました。

今日の講演会の次第の中に、私は「講師の言葉」として次のように書きました。

《八方ふさがりの現代の状況の中で、私たちはどんな希望を抱いて生きるのでしょうか。希望なんて夢のまた夢、「今を何とかしのいでいければそれでいい」、「今の生活で精いっぱい、先のことは考えない」、「老後を考えれば不安がいっぱい。夢も希望もない」と、そ

んな声が聞こえてきます。キリストの一番弟子となった使徒ペテロは、各地の異邦人キリスト信徒への手紙の中で、

「神は、キリストの復活によって私たちを新たに生まれさせて生ける望みを抱かせ、備えられた永遠の素晴らしい御国みくにを受け継ぐ者としてくださった。今しばらくは、様々な試練を耐え忍ばねばならないけれども、あなたたちは喜びで輝いているね。」(ペテロ第一の手紙一章3～6節の要約)

と励ましています。私たちに希望と勇気と力を与えてくれるペテロのこの手紙をご一緒に味わいたいと思います。》

ここに書いたとおりなんです。私たちに希望と勇気と力を与えてくれるペテロのこの手紙を一緒に味わいたいと思います。」と。今までの講演会ではだいたい私がお話をして、皆さんがそれを感じと聴いているという感じですけども、今日は皆さんとご一緒に味わいたい。これが私の本当の気持ちです。

ペテロという方は「キリストの一番弟子」とここに書きました。福音書を見れば、常にペテロは、何かあると一番先に手を挙げるような様子で、しゃべっています。おつちよこちよいのところもある。キリストが湖の上を歩いて来られた時でも、恐がっていたら、

「あつ先生だ!」

と。そしたら、キリストに

「来るなら来てもいいよ」

と言われたら、湖の上を歩きだしたという。他の弟子たちはやりません。ペテロは、「来い！」と言われて、「はい！」と行ったんです。三歩ほど歩いたら、我に返って、風と波とを見て恐くなって沈んだ。それでみんなは、「ペテロはあかんわ、信仰がない」と言う。私は違う、「ペテロは三歩も歩いた。誰か歩けるか」と言いたい。キリストの御力に吸い寄せられて無我夢中で三歩あるいた。そして、ハッとわれにかえって、「あれ、何だこれは!？」と思った瞬間に沈んだ。

私たちの人生は正にこれです。理屈で考えたりいろいろやっていたらだめです。吸い寄せられて、「ああ凄い！」といって、吸い寄せられてそこに行ったら、その中に入っただけです。そういうところへ私たちを導き入れなければおかないというのが、この聖書の呻きです。この「ペテロの手紙」は本当に素晴らしい。私は自分の智慧とか知識とかで語るつもりは全くありません。ここに語られているこの中に、皆さんと一緒に入って行って、これを味わっていきなさいと、そういう気持ちなんです。

それともうひとつ思いますのは、こういった新約聖書にある——ペテロだけではありません——パウロにせよ、ヨハネにせよ、そういったキリストの直弟子の方々、パウロはあとから弟子になりましたけれども、そういった方が語っている世界というのは凄いです。二千年前にこんな素晴らしい世界に生きていたかと。文化文明という点では、はるかに不自由な時代です。旅行するにしてもテクテク歩いていかなければならない。何か連絡をとりたくても、スマホみたいなものは何もないという時代です。誰かに手紙を託して「頼んだよ」と。その手紙がやっと思いで、またその返事

がやっと思いで返ってくる。そして、「ああ、良かった、うれしい、うれしい」と、パウロは喜んだりしています。そういう不自由な時代でありながら、これだけ喜びの生命の溢れる世界に生きています。現代人は完全に負けです。現代人は「賢くなった」といって威張っていますけれども、全然、霊の次元、天国の事態、神さまの次元からは完全にズレていますから。だいたい、自分の頭で「神さまが何か、解ろう」としているのは傲慢そのものです。そんな簡単なものだったら、こんな聖書が書かれる必要はない。だいたい、キリストご自身が、旧約聖書の長い歴史の中で、それを突き破って本当に顕れてくる。だから、みんなとまどつたでしょ。でも、このお方は本当の聖なる永遠の生命であると、ヨハネの福音書にはつきり何回も繰り返し書かれています。

「私を信ずる者は永遠の生命を持つ。私はその人を終わりの日に甦らせる」と繰り返して、ヨハネ福音書の6章に出ていますよ。そのとおりなんです。

「私を食べる、私を飲め。肉は役に立たない。生かすものは霊である。私の語った言葉は霊であり生命である」

と言ったら、

「弟子の何人もが離れて行った」

と書いてある。でも、ペテロは残った。

「あなたこそ永遠の生命を持っておられる本当の神の子だ」

と言って、ペテロは残ったと書いてあります。その当時の人々は素晴らしいいろいろな奇蹟の御業を

見てますから、とまどいもあつたと思いますけれども。今は二千年たつて、我々はそういう聖書というものがある程度、客観的に見る事ができる。と同時に、

「凄い世界だなあ。この昔の時代にとっても現代は及ばない。あのいろんな面で不自由な時にこれだけの喜びの世界に入っているのに、現代人は何やつているんだ」

という、そういう思いを私はしているんです。

それを愚かだと思う人は、愚かと思っていればいい。自分で自分を審んでいるだけです。この素晴らしい世界は、その次元に自分を入れていたただかないと、わからない世界ですから。天の次元とこの世の次元、全くこれは二元です、二元的です。自然科学にせよ、社会科学にせよ、その他の学問はこの地上の事は一生懸命に究めますけれども、神さまの世界のことは神さまご自身が「これだ」と言つてご自身を顕してくれなければ、とてもわかるものではない。それは当たり前のことです。その当たり前の事がなかなか現代ではわからなくなっています。理屈で考えるよりも、実際にこの中に入つて行つたら一番ですよ。

### 生き生きとした希望

そんなことで、私も今から皆さんとご一緒にこの「ペテロの手紙」から、今日、資料としてお配りさせていただいているものを順番にフォローしていきたいと思います。まず、「ペテロの第一の手紙」の挨拶からいきます。(ペテロ一・一〜25)

「イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たちへ。」

「仮住まい」というのは亡命者とか難民、迫害を受けてあちらこちらへ散らばつていった人たちのことです。私たちにとつては、「仮住まい」という言葉で、地上に仮住まいしている。私たちは地上に天国があるとは思っていませんから、この地上での生活は仮住まいです。本ものは天に備えられてある。そう思っていますから、仮住まいとはいいい言葉ですよ。「仮住まいをしている選ばれた人たち」、神さまに選んでいただいた人たちです。

<sup>2</sup> あなたがたは、父である神があらかじめ立てられた御計画に基づいて、「霊」によつて聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、また、その血を注ぎかけていただくために選ばれたのです。

これは一文で書かれているけれども、これを分解していくと、あなた方はまず神さまの計画、私たちが知らないところで、神さまは私たち一人びとりのためにちゃんとご計画を持つてくださっていた。英文では「purpose」「目的」という言葉を使っている。

私がこつに持っていますのは、『Good News New Testament 新約聖書』、新約聖書の英文 (TEV Today's English Version) と和文 (新共同訳) とが左右対照で書かれているものです。英文の方はとてもわかりやすい英語を使っています。まずは義務教育程度の学力があれば充分読める。もちろん私も所々は辞書を引きますけれども、本当に口語でやさしいし、わかりやすい。しかも、英文は割合

にプツ、プツ、プツと前から順番に小刻みに書いてある。日本語はダラダラと書いてあるけれども。「神は新しい命をくださった。それから神は何々してくださった。それはこういうことのためである」

とか、歯切れよく区切ってあるので非常にわかりやすい。そういうものもご参考にしていただければよろしいかと思えます。ここに、

「**霊**」によって聖なる者とされ」

とある。この「**霊**」というのは神の**霊**です。もう我々を聖なるものにしてくださった。

「イエス・キリストに従い、また、その血を注ぎかけていただくために」

というのは、目的は何かというと、我々をイエス・キリストに従わせるためである。それから、イエス・キリストの御血潮によって私たちを徹底的に潔めるためである。

恵みと平和が、あなたがたにますます豊かに与えられるように。

この「ますます豊かに」というのは「in full measure」と書いてある。つまり、測り升いっぱいまで溢れてしまう。そういう「in full measure」といつたらよくわかります。「ますます豊かに」測り難いまでに溢れてしまうほどに恵みが与えられますようにと。

わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に

蓄えられている、朽ちず、汚れず、しほまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。

これは長すぎますよ。長すぎますから、「講師の言葉」に私はそれを要約しました。

「神はキリストのご復活によって——あるいは、キリストを復活せしめることによって、

死体を甦らせることによって——私たちをまた新たに生まれさせてくださった。new life

「新しい生命」をくださった。生き生きとした希望を与えてくださった。それから、永遠の御国を受け継ぐものとしてくださった。」

この三つ。その全部の根底には神の恵みがあつて、キリストを甦らせるという事態を通して私たちにこの三つの恵みをくださったということ。キリストを甦らせたことよって、なぜそんなことになったのかというと、十字架、それから復活、それから天に昇られる、そして聖霊という姿で我々の中に降<sup>くだ</sup>ってきてくださる。そのすべてがここに書かれているようなことを確信せしめる。そういうことになっているのが順々にできます。ここでは結論的にこの三つが並んでいます。

あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。(ペテロ一1:1-5)

「終わりの時」というのがよく出てきます。「イエス・キリストが現れ給う時」というのもよく出てきます。とにかく今ではない。やがて神の国がやって来る。終わりが来る。イエス・キリストがその時には素晴らしいお姿で現れてきてくださる。その時にあなた方はどんな凄いことになるのか、どんな凄いものをいただくのか、そしてあなた方自身がどんなふうに変貌するのか。それに思いを

馳せると、もうこれは喜ばざるをえない。現在は、現実はどうなに苦しくて、迫害があり試練があり様々な哀しみにおそわれても、それをはるかに乗り越えて、将来与えられるものを既に現在のものとして、現在化してしまっている。

「現実のものとして、今のものとして、それで満たされて喜びに満たされているね」

と。「溢れなさい」ではなくて、「もう溢れているね!」と言っている。

「あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている」

そういう救い。これは救いの完成です。それを受けるために——今は過渡期です——神の力により、そして信仰によって守られています。まず神の力、神さまが守ってください。守ってくださいにしても、こつちが、「いやだ、いやだ」と拒否したら、これは神さまの力も来ないようですね。そこがやっかいなんです。眠っているようにして、やれるならいいのになあと時々思うんですけども。神さまはやっぱり人間というものをものすごく大事に思っておられる。心からそれを受け入れる、それを待つておられるんですよ。だから、こんなに二千年たつても、キリストのことを知らない人が多すぎて、クリスチャンだといつても、本気で聖書が求めているような受け入れ方をしていない。名前ばかりのクリスチャンがだいたいいる。ゴロゴロいる。これは残念です。でも、本当にキリストに、神さまに自分をあずけていけば、御力がしっかり守って貫いてくださる。その力が来ている。それを「はい」と受けとる。要するに、信仰なんていうものは、来ているものを「はい」と受けとることです。

外で太陽の光を浴びる。太陽は照らしてくれる。「ああいい気持ちだな」と。温泉に入る。「ああいい湯だな」と。皆これは向こうから来ているものを自分が受け入れている姿、それを「信仰」と呼んでいる。拒んでいる姿を「不信仰」と言っている。何かむやみに「信じてやろう」とか、無理やりに信じたって始まらない。それは何にもならない。現実に来ているものを、「ああ凄いわ、凄いわ、あつたまるわ」と。お茶を飲めばあつたかい。コーヒーを飲めばおいしい。御飯を食べればおいしい。そういうふうにして具体的になんです。生活で経験できることなんです。

キリストの力が我々を変貌せしめる

ここでペテロの手紙の名宛人である方々は学のある人々とは思えない。書いているペテロだって、そんなに学のある人ではないはず。漁師出身でしょ。パウロは学がありました。だから、ペテロはパウロのことを、「時々わからんことを言っているけど」と書いてある。理屈っぽいと。ペテロは単純ですから。その単純なペテロが単純な異邦人に——我々も異邦人信徒です——素直に語りかけている。それを素直に「はい」と受けとる。そういう応答です。それが私は素晴らしいと思う。

「それゆえ、あなたがたは、心から喜んでおられるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、あなたがたの信仰は、その試練によって

本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れをもたりますのです。」(ペテロ

「試練がなければ人間はだめなんです。いろんな様々な辛いこと、英文では「sad」悲しい、「あなた方は悲しみに溢れているけれども」と書いてある。悲しみ、苦しみ、試練にみまわれて沈んでしまいうだけども、それを乗り越えるものをあなた方はいただいている。その試練によって、本ものと証明される。金だつて精錬されて本当の純金になる。その金よりもあなたの方のほうがはるかに素晴らしい。試練によつて純金以上の、混じりけなき本当の神の子にされていく。それが、

「やがてキリストが現れてくださる時に、あなた自身もキリストの栄光のお姿に変貌してしまうんだ」

と。これはコロサイ書もピリピ書もみな同じことを言っている。これだけでも凄いことですよ。今は醜いアヒルの子か知らんけれども、やがて素晴らしい白鳥になる。今は毛虫かもしれない。それがサナギになり、やがて殻を破つて、チョウとなつて舞い上がっていく。変貌する。しかもそれは神の御力が、キリストの御力が我々を変貌せしめたもう。こういう恵みをいただいているから、何があつても屈しない。しかも、単に希望をもつて頑張っているのではない。力がきている。聖霊の力がくる。これが来なければ、それは掛け声倒れになってしまう。

結局、キリストというお方は何のために苦しんでくださったか、何のために十字架にかかつてくださったか。全部、神さまと私たちとの間を妨げる物を取つ払つて——ちようどキリストは神さまと本当に一つであつた。神さまはキリストの中に惜しみなくご自身の霊を与えられた。すべてを注

ぎ込まれた——キリストはそれを100%に受けて、それを流していかれた。キリストご自身は、

「私は何ものでもない。私は自分からは何も言えない。何もしない。全部、神さまが、すべきこと、語るべきことを私の中で働いておられるだけ。私はからっぽだ」

と。そういうキリストに素晴らしいことが起こっているわけですね、キリストを通して。これは私たち自身の中にも同質のものを与えないではおかないよと。キリストが永遠の生命者なら、キリストが輝かしいまばゆい姿で現れて来られたお方なら、

「あなた方だつて本当の恵みにより、同じところへ引き上げざるをえない。そこまで行かないと、私の愛は貫かれない、考えは貫かれない」

というのが、神の御意なんです。それを本当に受けとつてください。それは受けとつてもらわな

いとしようがない。

「そんなウソみたいな話は信じられるか」  
と。それは信じなくてもしょうがない。ただなんです。空気がただです、今のところはまだ。水はお金を出さないとただけない時代になつたけど、空気がただです。太陽の光もただです。でも、「そんなものは要らない」といつて地下に潜つていたら、これはもうだめです。

神の恵みはキリストを通して我々にも100%に注がれてきている。神さまと我々を妨げるものは全部、キリストが取つ払つてくださった。ダイレクトに来ている。それがキリストの生命となつて我々の中に宿つてくださる。聖霊となつて宿つてくださる。そのお方が我々を祈らせてくださる。その

祈りを神さまは聴いてくださる。そういう循環が出来上がったんです。その循環の中に我々が入っていれば安泰なんです。そこから出て行きますと危ない。我々はどっちだつてできるんですよ。向こうの方(天)へ行ってしまうと、もうそこしかないからいいけれども、地上にいるということは、神さまの方にまっしぐらに向かつて行けると同時に、そうでない世界へも行こうと思つたら行けるわけです。だから、これは大事なことだといって、何だかんだと勧められているのはそのためなんです。

### 魂の救い

「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせない素晴らしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。」(ペテロ一1:8-9)

どうですか、現代のクリスチャンで、このことがピッタリの人を探し出してきてください。皆さんがそうでしょ、私はそう信じたい。この会場を後にする時には、「そうだった、そのとおりで、これからも」と、そう言つてほしい。私は常々、

「聖書は私たちの身分証明書だ」

と思つています。つまり、自分自身も知らないことをちゃんと書いてくれている。

「あなたはこういう者にされているんだよ」

「えっ? こんな凄いものになつて居るの?」

「そうだよ、それ以外ではないよ。そのためにキリストをくださったのではないか」

「いや、こんな者のために?」

「こんな者に、罪びとのためにキリストをくださったとちゃんと書いてある」

キリストも言つておられる、

「正しい人間は、私には要らない。私を必要とするのは罪びとだ。私が、用があるのは罪びとだ。パリサイ人だとか、そういう当時の宗教的リーダーたちが蹴飛ばしているような、そういう人こそを私は救い上げたいんだ」

というのが、キリストの御思いでした。ですから、私たちは自分で自分を知らないんです、どんなに愛されているのか。神さまの方からあなたに対して、どんな凄いご計画とご愛をお持ちでいらっしやるのか。それを実現しようと一生懸命なさっているか。ところが、知らん顔して向こうを向いている。さつき、弘野先生が言われました、

「キリスト教徒であろうと、仏教徒であろうと、無神論者だろうと、関係ない」

と。そうなんです。みな本来、神の子なんなんですもの。本来、神の子として造られたのに、いつのまにかそれに背を向けて、自分勝手なことをやっていた。

「帰ってこい、帰ってこい」

と、神さまから呼びかけがあった。それで私たちは帰ってきました。帰ってきたらいい。

「帰っておいで。ホームレスの皆さま方よ、こんなホームがあるんだよ。帰っておいで」ということですね。なぜかというところ、本当に魂がしつかり救われているか。いや、魂だけではない。体も<sup>からだ</sup>栄光の姿に変えられるというのが将来ですね。今はまだ魂だけでも知れない。でも、魂が本当に生命をいただきますと、体も変わってきます。たとえ病んでいても、単なる病人ではない。うちに神の生命が、霊の生命が宿つていけば病人とはいえない。そういうふうになっているのだと私は思っています。

私(1932年9月生まれ)はもう年齢は81歳になりますし、2年前(2012年)に同じ年の妻を天に送りました。だから、後ろは80年あったとしたら、先は80年はありませんね。先はせいぜい20年、あるいは10年かもしれない。あるいは5年かもしれない。もう終わりは近づいてきている。そういう終わりの近づいている人間がこの世にしがみついて何になるか。しかも私は愛する者を天に送った。その前には孫を送りました。そして妻を送りました。

「そういう者たちが向こうで輝いて、幸せで、待つてくれている」

という、それがなかったら、私は地上で生きている甲斐がないと思つてます。皆さんはいかがですか？ 私はやっぱり80歳になったら、そう思うようになってきた。ここには80歳をもっと越えた方がいらつしやるかもしれない。年齢ではないです。本当に聖書は

「終わりは近い」

ということを言っています。これは世の終わりです。それから、我々一人びとりについては、人生の

終わり、それが近いわけです。この頃、「終活」という——就職活動ではない——「終わりにどう備えるか」という活動を「終活」という。やはり高齢化社会だからです。政府もいろいろとやつてくれているけれども、ひとつ欠けていますよ。本当のこの喜びの世界、本当の永遠の生命の世界、これを政府はよう言わん。

「宗教の問題には、政治は首をつっこまな」

というんでしょうか。施設は造る。でも、施設に入った方が、このペテロが言っているように喜びに溢れてくれているか。この中からもし施設に入る方があつたら、これを持って行つてください。

キリストはまばゆい御姿に変貌

「だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。<sup>13</sup>無知であったころの欲望に引きずられることなく、従順な子となり、<sup>14</sup>召し出してくださいださった聖なる方に<sup>15</sup>倣って、あなたがた自身も生活のすべての面で聖なる者となりなさい。<sup>16</sup>あなたがたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである」と書いてあるからです。

これは旧約聖書のレビ記の中に出てきます。

「神はご自分の御姿に人間をお創りになった」

と、創世記にありますように、同質なんです。地上で同質であったのはイエス・キリストお一人



した。我々は残念ながらみな落第生です。アダムの裔は全部、落第生。けれども、それを無試験入学させてくださった。神の国へ、落第生をすくい上げてくださった。これがキリストの十字架の贖いという恵みの事態です。

<sup>17</sup>また、あなたがたは、人それぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を、「父」と呼びかけているのですから、この地上に仮住まいする間、その方を畏れて生活すべきです。

<sup>18</sup>知つてのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなし生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、<sup>19</sup>きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。<sup>20</sup>キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていました。

この贖いの中に私たちも入っています。これは2千年前の方だけではない。全部入っていますから。

「ああそうだ、このキリストは天地創造の前からいらつしやったお方ですけれども、この今の終わりの時代に我々のために地上に現れてくださった。永遠の天の聖座を捨てて、現れてくださったんだ」

と。

<sup>21</sup>あなたがたは、キリストを死者の中から復活させて栄光をお与えになった神を、キリストによって信じています。従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。」(ペテロ一・13～21)

我々は直接、神を見たり、神を信じたり、神を愛したりできません。見えないお方、直接に言葉をもって私に語りかけたことがないお方を「ただ信じる」と言われても、困ってしまう。

「旧約聖書を見よ、そこに神さまが現れている」

「いやいや、おつかないです。ちよつと待つて下さい。恐いです」  
と。そういう、捉えどころのない神が、

「このお方を信じ、このお方にすがれ、このお方に従え」

といって、キリストを地上に送りこんでくださった。

キリストが十字架にかかる近い頃ですけれども、山上で変貌される場面があります。ペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人の弟子を連れて山に登られた。したら、まばゆい御姿に変貌された。モーセとエリヤが降りてきて、どのようにしてこの世を去っていくか、その出現世——この世を出て神の御許に昇られる——その昇り方について話をされていた。それは十字架なんです。それをお受けにならなくてはいけない。そして、栄光の姿に変わられるということについて話し合っていた。ペテロ、ヨハネ、ヤコブは気を失って倒れてしまった。やがて、エリヤとモーセは天に昇って行かれると、雲におおわれて何も見えなくなつて、イエス・キリストだけが残つておられた。その時に天から御声があつて、

「お前たちはこのお方に聴け」

という言葉があつた。このイエス・キリストにお前たちは聴けと。私たちは直接に神を知つたり、

神から直接に御声を聞くことはできないけれども、このイエス・キリストという方にもぶつかります。福音書の中でぶつかります。祈りの中でキリストを瞑想します。そういうことを通して、イエス・キリストに現れた神の恵みを知る。すべてイエス・キリストを見ることによって神さまを見る。

「私を見た者は父を見たのである。誰でも私を通らなければ神のみもとに行けない。私は道だ、真理だ、生命だ」

と言われた。イエスというお方の中に神さまがすべてを凝縮されて差し出された。また、キリストというお方をけとぼして、横に置いて直接、瞑想で神の中に入っていく、そういう人も神秘的な方々の中にいらつしやるかも知れませんが、それは危ないですよ。やはりキリストというお方において神を見る。キリストというお方において神の愛を知る。パウロだってローマ書の中で、

「御子<sup>みこ</sup>キリストにおいて仕えているパウロ。御子キリストの福音の中で私は神に仕えている。御子キリストをはずして直接、神に仕えない」

と言っています。私たちだって同じです。そういう意味で、

「キリストをくださった」

ということ自体がものすごい恵みです。

「これだ！ イエス・キリスト、これだよ！」

と。イエスは、

「聖書は私のことを証している。でも、あなた方は誰も、永遠の生命をもらおうと思って、

私のところに来ないではないか。あなた方は、聖書〔旧約聖書〕を研究して永遠の生命がありはしないかと一生懸命でやっているけれども、聖書は私のことを証言している。その本体なる私が永遠の生命をここに現したのに、私を蹴飛ばしているではないか。こんなことではだめだよ」

と、ヨハネ伝5章で言われた。

### 神の子にふさわしい生活

「<sup>22</sup>あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになつたのですから、清い心で深く愛し合いなさい。<sup>23</sup>あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることはない生きた言葉によって新たに生まれるのです。<sup>24</sup>こう言われているからです。「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。<sup>25</sup>しかし、主の言葉は永遠に変わることはない。」「これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。」(ペテロ

1・22～25)

ここに「偽りのない兄弟愛」とありますね。それから、「深く愛し合いなさい」とあります。次に行きます。2章(ペテロ1・2・1～25)。

「だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口<sup>あくぐち</sup>をみな捨て去って、

この「だから」というところに意味がある。あなた方はこんな素晴らしい者にされてしまったんだよと。あなたがどんな立派なことをやったからとか、あなたがどうやったから、学問があったからとか、そんなのではない。とにかく、

「神・キリストによってあなたにはこんな素晴らしい生命が与えられ、希望が与えられ、将来が約束されている、神の子なんだ、皆さんは。そんな素晴らしいものにされたんだから、そしたら、神の子にふさわしい生活をこの地上でやろうではないか。それはこういうことだよ。だから、このゆえに」

と言っている。そこを見失わないでください。そういう始めの部分がなかったら、単なる道德の教えになります。単なる戒律になります。それなら苦しい。そうではなくて、

「あなたは素晴らしい子供、神の子なんです。もうあなたの中にもものすごいものが宿っている。キリストが宿つてくださっている。そんなあなただから、ふしだらな生活はできっこないじゃないか」

と。旧約聖書の中でもレビ記はそうなんです。

「私は主である」

というのが必ず出てくる。

「あなた方は姦淫しない。なぜなら、私があなたの主であるから、神であるから。あなた方は殺人しない。なぜなら、私があなたの神だから」

と。そういうように、

「私があなたたちの神であるのに、あなたたちが姦淫したり、殺人したり、憎み合ったり、

そんなことをするはずがないではないか」

と、そういうことがちゃんとレビ記の十誡の中に出てくる。すべて神さまと人間の関係は、神さまの方から何か命令をくださるにしても、裏付けがある。裏付けがあつて、

「だから、できるよ。だから、やりなさい」

と。旧約聖書だつてそうなんです。ところが、当時の人々は「やりますよ、やりますよ。やればいいでしょ！」なんて、神さまと張り合っている。自分の力でやろうとした。そして、やったら、「やりましたよ！」と自分に栄光を帰する。これがだめなんです。キリストは100%、神さまの御意みこころを行いながら、

「私は何ものでもありません」

と一切の栄光を神に返しておられる。自分はゼロなんです。ところが、旧約の人たちは、「やろうじやないか、やろうじやないか。やりましたよ！」と言つて誇つていた。そして、やらない奴を審いていた。これをキリストは嫌われた、

「偽善なる学者・パリサイ人よ」

と。祈りだつて、

「隠れた所で隠れたことを見ておられる神に祈りなさい。ところが、あなた方は辻や街道

で『私たちはこんなふうに祈っている』と。断食する時も、可哀相な顔して断食して、『このように断食して私は神に喜ばれようとしている』と。すべて人に見せびらかして、人からの誉れを得ようとしている。これは最も神さまは嫌われる」

と。だから、せっかく素晴らしい十誡やその他のいろんな神の御教えをいただいておりながら、自分の力によって自分に栄光を帰せようとしたから、彼らがあぶない。パウロもそれをやりましたから。でも、徹底的に律法によっては救われない。律法をそういう形で、自分で行い、自分に栄光を帰して、自分の力でやるというのはだめです。

「すべてを神の恵みでやりなさい。恵みがすべてだ」

と、パウロは自分の体験から告白した。私たちはキリストという方を頂いてしまったから、このキリストがもうすべてである。そういうものにされてしまったから、「だから」とこうくるわけです。

### 伝道という役目

「だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、

こういうのがあったんですね、それまでは。あったからこんなふうに並べて書いてある。こういうものがはびこっているような教会はまだだめです。教会が本当にキリストの体としての教会であるのか。それとも、それと反する姿なのか。聖書に照らしたら、ちゃんと判断できます。牧師さんが言っているとかが言っていないとか、そんなのではなくて、聖書に照らして、聖書が願って望ん

でいるそういう姿が、ありありと実るような教会なら安心ですけれども、そうでなくて、偽善があり、表と裏があり、見えるところではいいことを言っているけれども、ちょっと離れたところでは逆のことを言っているとか、そういうふうなことがあれば、これはもうアウトです。ここでも、

悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。

本当の救いに到達するためです。

「あなたがたは、主が恵み深い方だということを味わいました。『この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。』あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。」

「生きた石」、リビングストーンです。「霊的な家」というのはまた後ほど出てきます。

そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。

この「祭司の役目」というのはヘブル書に出ています。簡単にいえば、預言者というのは神さまからの御言を、上からきた御言を民に語りかけ、上から下へ告げる。これが預言者の務めです。それに対して、祭司は民の罪を背負って、犠牲を聖所に行つて献げていく。年に一回、至聖所に行く。

動物の血でもってそれを清める。そういったいわば執り成しの役目をするのが祭司です。

キリストは両方なんです。神の御言をいただいた最高の預言者。神の御言を預かっているという意味の預言者であり、同時に大祭司、ただ一回切り至聖所に入って私たちの罪を完全に贖ってくださった。だから、両方をちゃんと持つておられるお方です。

十字架によって罪を贖うことは、キリストがなさってくださったから、今度は我々は執り成しの方ですね、この「聖なる祭司」というのは。そういう者になって、「神に喜ばれる霊的ないけにえ」——これは執り成しの祈りでしょうね——これを献げなさいと。

「聖書にこう書いてあるからです。」見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。これを信じる者は、決して失望することはない。」「従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」のであり、また、「つますぎの石、妨げの岩」なのです。

信じない者にとっては「つますぎの石、妨げの岩」となっている。

彼らは御言葉を信じないのでつますぎなのですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。

これはちょっと言い過ぎです。そんなふうにとられたら、救われることはないではないですか。

しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のもの

となった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。

ここで二つのことを言ってますね。私たちはかつて暗闇の中で苦しんでいた。それを光の中へ——「暗闇」というのは死です、陰府よみです。生命はありません——そういう中で呻吟しんげんしていた私たちを光の中へ、生命の中へと招き入れてくださった。そういうことをしっかりと受けとっていく。そして、

「ああ、救われたんだから、いいや、いいやといって、自分の中にとじこもって満足しているのではなくて、その恵みを伝えなさい」

と。祭司というのがありました。「執り成す」ということは同時に、神をまだ知らない方、神に背を向けている方に、

「どうぞ、この恵みを受けとってください。あなたも神の子なんですよ」

ということ伝えていく、そういう役目。大きくいえば、伝道という役目、これを賜っている者です。

「あなたがたは、「かつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けなかつたが、今は憐れみを受けている」のです。」「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。」「また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をさがめるようになります。」「(ペテロ一2:1-12)

「訪れの日」は「終わりの日」ですね。あの当時は、イエス・キリストを本当に素晴らしい救い主だということは信じていませんでした。なにせ、ユダヤ人たちによって、神に反逆する大罪の悪人として十字架につけられた、そういうイエスですから。それを

「イエスは救い主だ」

といて宣べ伝えるようになったんですから、人々は半信半疑でした。そういう時には、「あんなイエスという大罪人を救い主として信じている変わった人種、悪い奴らだ」というふうな目で見られていたかもしれません。しかし、現実の生活を見たら全然違う。

「自分たちに何も持っていないのに、光かがやいている。ああ、あれは本ものだ」

と。そういうふうになつてくれるために、

「あなた方は神の僕らしく生きるんですよ」

ということを言っている。

キリストと同じ次元に

それから次に、「召し使いたちへの勧め」(ペテロ一2・18、25)というのをここに出しましたけれども、これが現代の人にとつては非常に躓きの箇所です。労働問題というものをすぐ考えますので、

「このとおりやっていたら、無茶苦茶な雇い主が無茶苦茶なことをやって、搾取に搾取を

重ねて、それで平然としているようなことになるではないか」

と、そう言われるかもしれませんが。けれども、そういうレベルで考えたらだめなんです。これをもっと高い次元で、つまり

「キリストと同じ姿になりなさい」

ということ。キリストは、罵られて罵り返さず、

「左の頬を打つ者に右の頬を向けよ。悪人に手向かうな。むしろ彼らのために祈れ」

と。そんなことを言える人はより高い次元でしか言えない。同じ平面で戦っていたら、そんなことは絶対に言えない。そうでしょ。同じ次元で並んでやっている人間に、キリストのことを持つてきたら全然だめです。もう少し突き抜けたところで、

「彼らは哀れなやつだ。こんなことでしか生きてられない哀れなやつだ。彼らを祈って助けてやらないといけない」

と。キリストという方はそういう高い次元から語っておられる。だから、あの山上の垂訓なんていうのは、生身の人間がそのまま実行しようと思うとだめです。あれが現実化するには、自分たちがキリストと同じ霊の次元に來なければいけない。そのキリストは、

「必ずそうさせてあげるよ」

という。

「天の父の完きが如く完かれ。天の父は善き者にも悪しき者にも陽を昇らせ雨を降らしつくだわん」

と、そういうことを仰っている。それを実現しようとしたら、自分たち自身が小さなキリストにしていただかないとね。キリストと同じ次元に自分たちが引き上げていただかないと、あんなことはできっこありません。ここで「召し使いたちへの勧め」というのは、そういうものとして受けとっていただかないと。つまり、召し使いたちに、

「あなたはキリスチャンだろ、キリスチャンというのはキリストと同じように生きるんだよ。キリストと同じ次元に生きるように召されている。それを通して神の栄光が現れる。だから、自分が苦しむ、あなたが苦しむということは、キリストの苦しみにあずかる。キリストは苦しみを通して、あの栄光のお姿に変貌された。あなた方も同じなんだ。つまり、キリストとあなた方とは一つ、同質にならないといかん」

という、それがあんなんです。そういうことはキリスチャンでなければできない。本もののキリスチャンでない、その「召し使いたちへの勧め」なんていうことは、到底実現できません。でも、実現したら、凄いいと思いますね。

「召し使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい。」

労使関係の間で、雇い主ですな。

善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい。<sup>19</sup> 不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。<sup>20</sup> 罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れ

になるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。<sup>21</sup> あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストも

あるいは、これは「キリストこそ」と、

あなたがたのために苦しみを受け、

そうなんです。「キリストの苦しみはわがためなり」と。人ごとではなかった。キリストはあなた方のために苦しみを受け、

その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。<sup>22</sup> この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。<sup>23</sup> ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。<sup>24</sup> そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。

これはイザヤ書53章のところに預言されています。

わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。

これはローマ書の5章、6章のところに書いてきます。

そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。<sup>25</sup> あなたがたは羊のようにさまざまにいましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。「(ペテロ二・1〜25)

昔、戦後すぐに「鐘の鳴る丘」というラジオ放送がありました。あの頃は孤児とかいろんなさすらいの子供たちがたくさんいた。そしてつい悪の方に走ってしまふ。それを引きとって、そういった孤児たちやさまよっている子供たちを受け入れて、そして立派な少年となって再生していくような、そういう物語でした。我々だってそうなんです。戦後は本当に混乱の社会でしょ。戦後の人たちはそうやって、やはり本当の神さまに出会うまでは、自分たちで彷徨<sup>さまよ</sup>っていたんです。

### 自分捜しの旅

思春期というのは全部、自分捜しの旅なんです。思春期は、人に頼りたくない。自分で自分の道を探します。大人に何か言われると、

「放っておいてくれ、自分は自分でやるから」

と強がりを書いて苦しむ。そういう期<sup>ま</sup>です。そういった、さまよっていた私たちがあつた時、何かのきっかけで、あなた様(神)に出会って、そしてキリストを教えられるわけです。主キリストのもとに帰ってくる。

「やっと、魂の故里を見つけた。ここが自分が帰ってくる所だった」

と。私がそうなのは24歳のときです。それからもう57年になろうとしている。

「<sup>25</sup>あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。」

これはイザヤ書53章に出てきます。それから次は3章にいきます。(ペテロ一3・8〜18)

「<sup>8</sup>終わりに、皆心を一つに、同情し合い、兄弟を愛し、憐れみ深く、謙虚になりなさい。

。悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい。祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです。……<sup>17</sup>神の御心による

のであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい。<sup>18</sup>キリストも、罪のためにただ一度苦しみました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しめられたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡され

ましたが、霊では生きる者とされたのです。」(ペテロ一3・8〜18)

この肉では、肉体においては私たちと同じ姿の人間としてはそうなんです。キリストは神の御座<sup>みくら</sup>におられた霊なる永遠なるお方だったのにその御座を捨てて、人の姿となってマリアさんの中に宿られた。そして、我々と苦しみを共にしてください。だから、我々の弱さをすべて知ってください。涙を知ってください。その方は本来、死ぬはずのお方ではなかった。なぜなら、キリストは神の御意<sup>みこころ</sup>だけをわが意として生きられた。神さまを離れてキリストという存在はなかった。

「父よ、あなたの御意をなさせたまえ」

と。そうやって生きること「義」といいます。己<sup>おのれ</sup>ではなくて、神さまの御意だけを貫いて、御意にだけ従って生きる生き方。ひたすら御意に従って生きる生き方。これが義人の生き方なんです。

「義人なし、一人だになし」



と言われていますのは、そういう人間はどこを捜してもいなかった。ところが、イエスという方は正にそういうお方だった。

キリストがヨルダン川でヨハネからバプテスマをお受けになった時、ヨハネは拒んだ。

「あなたは私ごときものから洗礼を受けるような方ではありません。あなたは神の羔羊でいらっしゃる。神の子でいらっしゃるあなたは、とうてい我々罪びとは違うんだから、そんな罪の悔い改めの洗礼なんて、余計なことですよ」ところが、

「今は受けさせてほしい」

と言って、人々と同じように自分をあのヨルダン川の水の中に沈められた。自分を何者かと思っていらいらっしゃらない。ところが、それをご覧になっている神さまはただではおかない。天が開けて聖霊が鳩の如く降ってきた。

「これこそ我が愛する者、我が心にかなる者」と。

「やつと現れた!」という、神の喜びの声ですよ。今までヨハネから洗礼を受けたのはみんな落第坊主ばかりです。これはやがて現される救い、それを待ちのぞむために、まず通過儀礼として悔い改めのバプテスマを受けなければならぬ。ところが、今現れたこの人は全然その必要がないのに、「自分は悔い改めの必要がない」なんていうことすら自覚されていない。「私も受けさせてほしい」と。この徹底的な砕けの姿。神の前に平伏している姿。これが御意にかなった。「これぞわが意にか

なる者、わが愛する者」という声があつて、聖霊が鳩の如く下ってきた。

それで、聖霊に満たされて、すぐ伝道かという、そうはいかん。四十日四十夜、荒野でサタンと闘われた。徹底的にサタンと闘われた。そして、何があつたって、

「神のみ」

というところに突き抜けられた。そして、伝道が始まったから、それは凄いことが起こらざるを得ませんよ。あれがウソだと思ふなら、自分でやってみたらいい。

サンダーシングはやつたんですね。サンダーシングという方は本当にあのキリストと直々に対話をした方です。インドの方ですけれども。そしてあの「四十日四十夜」をやったんですよ。でも二回目にはさすに救急車で運ばれるような状況になったようです。三回目にはやりとおした。そういうことで、キリストの生きておられた次元を、今の人たち、宗教にたずさわる方々は、本当にできれば体験してほしい。私なんかはそんな体験はとも出来ない人間なんです。御意をそのまま受けとって、「はい」と言つて従つて行く。それに徹していただきたいと思ひます。

霊の賜物

その次に4章にいきます。(ペテロ一4・7〜14)

「万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。」

9 不平を言わずにもてなし合いなさい。10 あなたがたはそれぞれ、賜物たまものを授かってい  
るので、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに  
仕えなさい。

これは大事なことです。神さまは一人びとりの個人的な個性に応じて賜物をくださる。いろんな  
賜物をそれぞれにくださる。ところが、その賜物というのは、目的を持っていて、それは人に仕え  
るところが、人は往々にして、賜物をいただく、自分は何者かと思ひ、偉いものになったように  
勘違いして、そしてその賜物を私わたくしする。そういう迷いの中に引きずり込まれることが危ない。

パウロはコリント前書12章の所で、「霊の賜物」と言っている。癒しの賜物、異言の賜物、その他  
いろんなものを挙げていて。しかし、それは今言いましたように、神の御意を貫くための武器、手  
段にすぎない。手段である賜物と、恵みそのもの、賜物中の賜物は愛なんです。それがコリント前  
書13章に出てくる。12章で賜物をつらつら並べた後に、

「最上の道をあなた方に示そう」と  
言つて、13章で、

「たとえ私が天使たちの言葉を語ろうと、山を移すほどの信仰を持っていようと……、愛  
がなければ私は空しい。愛は寛容であり情け深い。」

というのが共通です。神の我々に共通にくださる性質、神の性質、それがあそこに表れている愛な

んです。これも手段ではなく本質です。信仰、希望、愛。それがあの13章に出てきます。賜物はそ  
れぞれの必要に応じて武器として手段として賜るもの。それにふさわしく使わないと申し訳ない。

10 あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善  
い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。11 語る者は、神の言葉を語  
るにふさわしく語りなさい。奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕し  
なさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお  
受けになるためです。栄光と力とが、世々限りなく神にありますように、アーメン。

ここなんです。栄光を神にという。私たちにおいては、どんなことにおいても最後は、

「栄光は神に、キリストに」

と、それなんです。学者は学者としてキリストから智慧をいただいて、学問的な何か成果が上がっ  
たとします。それはキリストから智慧をいただいて導きがあったから、こういうことができた。「栄  
光は神に」と、これが本当の学者の在り方だと思つています。

12 愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か  
思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。13 むしろ、キリ  
ストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れ  
るときにも、喜びに満ちあふれるためです。14 あなたがたはキリストの名のために非  
難されるなら、幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊が、あなたがたの上にとどまっ

「ペテロ一4・7〜14」  
 それから5章にいきますと、(ペテロ一5・5〜11)

「同じように、若い人たち、長老に従いなさい。皆互いに謙遜を身に着けなさい。なぜなら、「神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みをお与えになる」からです。

だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には高めていただけます。7 思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけてくださるからです。

この「思い煩い」は、我々から消えゆくことはありませんよ、この地上で生活をしていましたら。家族の中で、職場の中で、いろんな人間関係の中で在るときに、絶えず思い煩いというのは襲ってきます。しかし、それに囚われないように。思い煩いは神さまにお返しする。これは文語の訳によりますと、

「もろもろの心労を神に委ねよ、神なんじらの為に慮り給えはなり」というように約束してくれています。ピリピ書の中でも、

「何事も思い煩うことがないように、ことごとくに感謝と讚美をもって、神さまに自分の心の思いを打ち明けなさい。そうしたら、この世では、地上では味わえない平安があなた方を支配するから」

と書いてます。それから、マタイ伝の中では、6章25節くらいに、

「何を食べようか、何を飲もうかと思ひ煩うな。必要なものはすべて神がご存知である。一日の苦労は一日で足れり。まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられる。一日の苦労は一日で充分だ。……すべて労する者は我に來たれ。われ汝らを休ません」

と。それをしっかりと覚えていて、自分のいわば支えにしていく。そういう生き方ですね。

身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。

人間が、我々がそうなるのではない。人間の中に巣くって我々を害す悪魔の霊が我々を傷つけようと狙っている。どんなに酷くてもその人自身が酷いのではなくて、その人をそうさせている背後にいる霊が悪い。そこまで突き抜けてもらえないならいいですね。

「神よ、彼らを赦してやってください。彼らは何も知らずにやっているのです」

と。キリストは十字架の上でそう祈られた。私たちも、もしも、いろんな酷い目にあわされた時に、

「彼らではないんです。彼らをあのようにつまみから救い上げてください」  
 悪の霊をやっつけて、彼らをそういう憎しみから救い上げてください」

と。そこまで折れるようになったら、これは本ものです。なかなかそこへ行かないけれども、それを心から思ったら、どつかれても、「ああ、ここでどつき返したらいかん」と、そう思えたらいいですけども。私は自信ありませんよ、逃げますから。どつかれたら、どつき返したくなるのが

人間のことだから。逃げれば、罪を犯さずに済みます。「君子危うきに近づかず」ということですね。信仰にしっかりと踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい。あなたがたと信仰を同じくする兄弟たちも、この世で同じ苦しみに遭っているのです。それはあなたがたも知っているとおります。<sup>10</sup>しかし、あらゆる恵みの源である神、すなわち、キリスト・イエスを通してあなたがたを永遠の栄光へ招いてくださった神ご自身が、しばらくの間苦しんだあなたがたを完全な者とし、強め力づけ、揺らぐことがないようにしてください。<sup>11</sup>力が世々限りなく神にありますように、アーメン。」(ペテロ一5・5～11)

この約束ですね。ペテロが語っているにしても、背後にキリストがおられる。キリストがペテロを通して語っておられる。そう受けとっていただいていると思います。

### 主の来臨の約束

これで「ペテロの第一の手紙」のエッセンスは終わりました、それから次に、「ペテロの第二の手紙」です。「主の来臨の約束」(ペテロ二3・8～13)。<sup>12</sup>これはすぐにもやってくるキリストが言われたのにかかわらず、なかなか終わりが来ない。「なんだ、自分たちはだまされているのかしらん?」と、こういうふうにいる人間が現れてきた。それに対してペテロは語りかけている。

「愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。<sup>13</sup>ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は

約束の実現を遅らせておられるではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。<sup>10</sup>主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまします。<sup>11</sup>このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。<sup>12</sup>神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。<sup>13</sup>しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」(ペテロ二3・8～13)

こういう言葉が語られてからまた2千年たってしまいました。けれども、この頃は138億年の宇宙の物語とか、宇宙の学者たちが言い始めています。1億年だけでもすごいのに、いや1万年でも凄いですよ。私たちはせいぜい2千年前、あるいは4千年前——モーセたちの時代とか——そのくらいのことしか知らされていない。それに比べれば、そんな138億年なんて気の遠くなるような話ですけど、宇宙が生成してそういうことになっているようですね。だから、これからまた何年後、何万年後にこのペテロの言っているようなことが起こるか、そんなことは誰も知らない。また知る必要もない。キリストご自身もご存知なかった。でも、地上のことに惑わされてはならない。地上のことに囚われてはならない。

「常に地上を突き抜けた本当の永遠界に目をつけて、その中に生きなさい」

と。これだけは変わらない。たとえこの地球は滅びなくても、私たち自身は必ず終わりを迎えます。そうでしょう。終わりを迎えないという人は一人もいません。終わりを迎えた時に、終わりが近ければ近いほど輝いて生きる。熾<sup>さか</sup>なる生命に生きています。身体が衰えていくのと逆比例的に内なる人はますます光がやいて、強く逞<sup>たくま</sup>しく成長していく。そういう生き方をキリストは約束してください。聖霊に導かれ、聖霊が宿<sup>すま</sup>っているクリスチャンというのは、そういう生き方を元<sup>もと</sup>了<sup>り</sup>している。私はそう信じています。たとえ不自由な身体になろうと、どんなに病によって蝕<sup>む</sup>まれようと、そんなことでへこたれるような内なる生命ではない。あらゆるものに対してそれを突き抜けて本当の生命の輝きを現わす。これがクリスチャンの晩年の使命だと私は信じています。

元気な青年たちが輝いて生きる。それも素晴らしい。ああ青春の輝きはいいなと。それはそれで素晴らしい。でも、そういう素晴らしい姿があるけれども、私たちは年老いてなお熾<sup>さか</sup>んに、若い時よりもしっかりと素晴らしい姿で生きていく姿、これを後の世の人たちに示すこと。それも一人だけだつたらだめです。「あの人は特別だよ」と、それで終わりなんです。そうではなくて、皆さんお一人お一人は神の子なんです。お一人お一人は神さまの性質をいただいた、神の生命を、神の霊をいただいた、同質なんです。あなた方はキリストと同質、キリストは神と同質、故に神と我らが同質、こういうふうになる。

さっきの英文の聖書には、コロサイ書なんかを読んでみますと、「聖徒」(聖なる者)と書いてない。

「ピープル オブ ゴッド」(People of God)「神の人々」と書いてある。あなたたちは神に属する人々だよと。「聖徒」というと、「聖とされた人間」という感じですけども、「ゴッド・ピープル」(神の人々)という言葉が聞くと、なにか身震いするほどうれしい。

その次は、「ヘブライ人への手紙」です。(ヘブライ13・8～21)

「<sup>8</sup> イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。……<sup>14</sup> わたしたちはこの地上に永続する都を持っておらず、<sup>来<sup>きた</sup></sup>るべき都を探し求めているのです。<sup>15</sup> だから、イエスを通して賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえる唇の実を、絶えず神に献げましょう。<sup>16</sup> 善い行いと施しとを忘れないでください。このようないけにえこそ、神はお喜びになるのです。……<sup>20</sup> 永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死者の中から引き上げられた平和の神が、<sup>21</sup> 御心に適<sup>あた</sup>うことをイエス・キリストによってわたしたちにしてください、御心を行うために、すべての良いものをあなたがたに備えてくださるよう。栄光が世々限りなくキリストにありますように、アーメン。」(ヘブライ13・8～21)

### 聖霊のバプテスマ

その次は「エフェソの信徒への手紙」1章を駆け足で見たいと思います。「神の恵みはキリストにおいて満ちあふれる」(エフェソ1・3～13)という見出しです。

「わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。」<sup>4</sup> 天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。<sup>5</sup> イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。<sup>6</sup> 神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。<sup>7</sup> わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。<sup>8</sup> 神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、<sup>9</sup> 秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。

英文では「シークレット」(secret)と書いてあります。神さまの秘密ですね、「秘められた計画」とここでは訳していますが。

これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。<sup>10</sup> こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。<sup>11</sup> キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者と

されました。<sup>12</sup> それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。

ここまでは、「わたしたち、わたしたち」と、パウロたちは自分のことを言っているわけです。でも、これは私たちと同質です。なにもパウロたちだけが特別扱いで、私たちは一番煎じということではない。私たちも同じです。言葉使いとしては、「あなたがたも」と、こういう形で順序として、まずパウロたちが先に神の栄光にあずかる。それから、伝道を通して異邦人たちにその恵みがわちち与えられる。こういう順序がありましたから、「わたしたち、そしてあなたがたに」と、こうききますけれども、質的には一緒です。

今まで読んできたところは全部、これは完了形なんです。「神はこうしてくださいました」と。「これからこうしてください」ではなくて、「もうお選びになりました」ということ。

「わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、あなたはわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。」

と。もう選ばれたんです、私たちの生まれ出る前に。御心のままに前もって、神さまの目を定めておかれた。それは神の恵みをたたえるために。そして、この御子キリストにおいて、その御血潮によって贖われ、罪を赦されました。これも完了形です。

すべてのものはキリストへ還<sup>かえ</sup>って行く。天なるものと地なるもの。それから、ユダヤ人と異邦人。

今まで矛盾し、対立関係にあったものが全部一つに帰せられてしまう。それがこのエペソ書の始めのところに高らかにうたいあげられています。

<sup>13</sup>あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、  
そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。」(エフェソ1:3-13)

聖霊を賜った。聖霊というものは、皆さん一人びとりの中に宿っていらっしやるよと。この「聖霊」という言葉は、我々日本人がこの福音書の中に入っていくときに、こういった使徒の書簡に入っていくときに、ちょっと引つかかるんですね、

「聖霊というのはどのようにしてただけるんだらうか？」

と。確かに使徒行伝、使徒言行録を読みますと、復活されたキリストはしばらく弟子たちと一緒に過ごされ、それから天に昇られた。そして、

「祈っていないぞ」

と言われて、十日間祈っていた時に、五旬節の日に、火のようなものが一同の上にくだって、そこに集まっていた者が皆、弟子たちを始め、聖霊によって異言で、異国の言葉で神を讃え出したということがあります。あのようなペンテコステにおいて起こった聖霊のバプテスマを、

「これだけが聖霊のバプテスマだ」

というふうにする人があるかもしれませんが、けれども、私はそうは思わない。私はそんな体験はない。私の場合には40年の間に、じわりじわりといつとは知らず感染してしまった。この頃はインフルエ

ンザの感染だとか、いろんな感染があります。望んでもいないのにいつしか感染してしまうということがあります。私は望んでいました。

「本当に聖霊によつて満たされたい。願わくは聖霊のバプテスマを賜りたい。ガラリと生まれ変わったというようなことを体験してみたい」

と。そういうことを誇らしげに証言する人があるから、コンプレックスをいただきました。ところがいつの頃からか、そういうことは気にならなくなりました。なぜ気にならなくなりましたかという、私が語ると感動してくださる方がたくさん出てきた。

「それは私が語っているのではない。私の中の聖霊が語りかけていらっしやるから、聞く人が感動してくれる。そうしたら、私はもう聖霊の器にされているんだ」

と。そういうふうになるようになった。それしかない。単純に御言まことばに信じて、キリストに信じて、

「キリストによらないと、私は何もありません。あなたしかありません」  
と、キリストにひたすらよりすがって、赤子のようにキリストにしがみつく、その在り方だけです。そしたら、いつのまにかキリストが宿っていらっしやる、自分でも思うようになります。

### 十字架と聖霊

また、キリストの御思いはそれなんです。十字架にかかりっぱなしではありません。死を滅ぼして、霊体となって現れてくださった。あの山上の変貌と同じお姿で現れてくださった。そして今度は、

弟子たちの中に帰ってきてくださった。その聖霊を受けた弟子たちは、今度は迫害も恐れぬ。それはキリストが乗り移っておられますから、素晴らしい御業が次々と起こってきた。

「あなた方は私がした以上のことをする」

とキリストはヨハネ伝で約束しておられる。キリストは地上では人々を救い上げることはできなかった。病気を治したり、いろんなことはなされたけれども、人を本当に神の中に救い上げることは、地上ではなさらなかった。十字架で罪と死をひっかぶって、それを滅ぼした。そして、勝利、凱歌はあの栄光の御体で現して、天に昇られ、今度は降って来てくださった。そして、一人びとりの中に宿る。これがキリストの御目的です。それが成就するまでは、キリストはまだ中途半端な状態です。キリストが十字架にかけられた目的は私たちを本当の神の子にすることです。本当の神の子は神の霊をいただいている子です。肉体を宿としていながら、その中にキリストの霊が宿る。その霊がますます優位を占めていく。主導権をにぎって私たちを導いてくれる。体を脱ぎ捨てる時は、完全に霊体となって、キリストのあの栄光の御姿に化せられる。そして、キリストにお会いする。

「終わりの日」まで待つ必要はありません。キリストは私たちを直ちに迎えてくださる。私たちはこの体を脱ぎ捨てますと、もう直ちにキリストはお迎えくださる。それにふさわしい在り方を地上でしないと、向こうへは行けませんよ、恥ずかしくて。キリストにお会いしたら、

「あなたは地上で何してたの？」

なんて言われるかもしれません。「はあ、地上では、とても信ずることができませんでした」なんて、

皆さん、言わないようにね。

「いや、地上にいるときから、イエスさま、あなたはもう私の中に宿って、助けて、いろいろ支えてくださいましたね」

と。確かに私はまだ御姿を見たことはない。ペテロや使徒たちのように、御姿を見たことはない。でも、見ないけれども信じて、輝いて喜んでいる。そういう生き方をしなければ。それをやるようにと、キリストは苦しんでくださったんです。だから、はっきり言って、キリストは皆さんの中に入りたくてしょうがないんです。

「一緒に生きよう。地上がどんなであっても、どんなに闇であっても、私の光があなたの中に輝くから、夜も昼のように輝くから」

と。それがキリストの祈りです。私たちのためにそれを天界で祈ってくださいている。それを私たちは、

「はい、ありがたいことです。本当にありがたい。全部お受け致します」

と。私にとって信仰というのは、そういう喜びを胸にして、それをみんな受けとること、これ以外にありません。強い信仰とか、力ある信仰とか、そんなものは私は何もありません。ただ、御言が素晴らしいですよ、ヨハネ伝なんか素晴らしいですよ。

「私を信ずる者はもう生命の中にある」

とはつきり約束して下さっている。



「墓にあらうが、みな甦よみがえって私の声を聞く。声を聞いた者はみな生きる」

と、そこまでヨハネ伝5章に書いてあります。私はこの使徒たちの書簡も素晴らしいけれども、それを前もって裏付けてくださっているヨハネ伝は本当にすごいと思います。それからあと、マタイ、マルコ、ルカ、こういう福音書も素晴らしい。要は、この新約聖書一冊、これが私たちの生命の源です。旧約は、「これを全部読め」というのは大変ですよ。私はできません。でも、新約は本当に読まないではいられない。読めば力がくる。希望が湧いてくる。きつと皆さんが、「何かこれはどこかズレているな」と思うときは、その世界から離れているからです。感度がにぶっている。感度が鈍っているときは、やつぱり早くここへ帰ってくるように。ここへ帰ってきて、よく響くようになって大丈夫です。

「なんだ、これは全然ピンとこないな」

なんてのはだいたい鈍っていますから。私においては、感度が鈍ったらだめなんです。これを開いた時にビュンビュンと言葉が飛び込んでくる。

「そうですね、そのとおりですよね！」

と、聖書と対話する。そういう感度であるときは非常にいい。ところが、ちょっと離れますと、感度が鈍ってくる。だから、

「たえず感謝していきなさい。たえず祈っていきなさい。たえず神の言葉、キリストの言葉をあなたの方の中に生き生きと生かしていきなさい」

と、そういうことが勧められているのは、みなそのわけです。

キリストがお手本

2章にいきます。(エフエソ2:1-10)

「さて、あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです。この世を支配する者、かの空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順な者たちの内に今も働く霊に従い、過ちと罪を犯して歩んでいました。わたしたちも皆、こういう者たちの中にいて、以前は肉の欲望の赴くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していたのであり、ほかの人々と同じように、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。

しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してください、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、——あなたがたの救われたのは恵みによるのです——キリスト・イエスによって共に復活させ、

キリストだけが復活したのではない。私たちも同時にそこで同じ姿にもう変えられている。見えないう神の次元に。私たちのこの世の次元ではまだそこまでいってないけれども、神さまの御計みもとでは、神の次元では、私たちは既にもう復活にあずかってしまった。

共に天の王座に着かせてくださいました。これが皆さんの本当の姿です。

7こうして、神は、キリスト・イエスにおいてわたしたちにお示しになった慈しみに  
より、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。8事実、あ  
なたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力による  
のではなく、神の賜物です。9行いによるものではありません。それは、だれも誇るこ  
とがないためなのです。10なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、  
神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られ  
たからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。'(エフエソ2:1~10)  
次は3章です。(エフエソ3:14~21)

「14こういっわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。15御父から、天と  
地にあるすべての家族がその名を与えられています。16どうか、御父が、その豊かな  
栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、  
「内なる人」とは霊人、霊的人格です。」

17信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住ませ、  
「信仰によって」というのは、そっくりそのまま御言を受け入れることによって、心の内にキリスト  
を住ませ、御霊のキリストに住んでいただき、

あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるよう。」

愛とキリストとは一緒ですから、キリストに根ざし、キリストの上に、キリストを土台としてしっ  
かり立つ者としてくださるよう。」

18また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、  
深さがどれほどあるかを理解し、19人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようにな  
り、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満  
たされるように。20わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思  
ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、21教会に  
より、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アー  
メン。'(エフエソ3:14~21)

それから4章です。(エフエソ4:1~32)

「そこで、主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます。神から  
招かれたのですから、その招きにふさわしく歩み、2一切高ぶることなく、柔和で、寛  
容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、3平和のきずなで結ばれて、霊による  
一致を保つように努めなさい。4体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、  
一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。5主は一人、信仰は一つ、  
洗礼は一つ、6すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上であり、  
すべてのものを通して働き、すべてのもののおにあらわれます。」

神さまは万物に浸透しておられるという。

17で、「わたしは主によって強く勧めます。もはや、異邦人(神を知らない人)と同じように歩んではなりません。彼らは愚かな考えに従って歩み、<sup>18</sup>知性は暗くなり、彼らの中にある無知とその心のかたくなさのために、神の命から遠く離れています。<sup>19</sup>そして、無感覚になって放縱な生活をし、あらゆるふしだらな行いにふけてとどまるところを知りません。<sup>20</sup>しかし、あなたがたは、キリストをこのように学んだものではありません。<sup>21</sup>キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、真理がイエスの内にあるとおりに学んだはずです。<sup>22</sup>だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっていて古い人を脱ぎ捨て、<sup>23</sup>心の底から新たにされて、<sup>24</sup>神にわたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにならなければなりません。<sup>25</sup>だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。<sup>26</sup>怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。<sup>27</sup>悪魔にすきを与えてはなりません。<sup>28</sup>盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。<sup>29</sup>悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。

これが大事です。人を励ます言葉、人を元気にする言葉、それを語る。私たちの口は神を讃えるため、神を讃美するためと、人を元気づけるため。この二つのために口が与えられている。人の欠陥を暴いて貶めたり、その他いろいろな人を失望落胆させるような言葉を口にするものは、あつてはならない。<sup>30</sup>神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。<sup>31</sup>無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、これは全部、肉の業です。

一切の悪意と一緒に捨てなさい。<sup>32</sup>互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してください。赦し合いなさい。」(エフェソ4:1-5)

「あいつのことは絶対ゆるせない」なんて、そういうことをクリスチャンは口にしてはいけません。次は5章。(エフェソ5:1-5)

「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に敬う者となりなさい。<sup>2</sup>キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。何といつてもキリストをお手本にして、皆さん、歩みになれば大丈夫だ。」

<sup>3</sup>あなたがたの間では、聖なる者にふさわしく、みだらなことやいろいろの汚れたこと、あるいは貪欲なことを口にしてはなりません。<sup>4</sup>卑しい言葉や愚かな話、下品な冗談もふさわしいものではありません。それよりも、感謝を表しなさい。<sup>5</sup>すべてみだ

らな者、汚れた者、また貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまえなさい。」(エフェソ5:1-5)

### キリストと共に復活

それから次に「コロサイの信徒への手紙」にいきます。これと同じようなことが書かれています。3章。(コロサイ3:1-17)

「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、もう復活させられたんですからと。エペソ書にありましたね、

「あなたがたはキリストと共に復活させられた。共に天の座に坐るようになっていただいた。」

これは霊的現実だと。一番奥深い神さまの現実においてはそうなってしまうている。その神の現実と、私たちの地上の実際の姿の間にはだいぶギャップがある。ギャップがあるけれども、あなたの本物の姿はそれだよと。そしたら、

「地上で仮住まいしている時も、そういう本ものにふさわしい生き方をしようではないかと、そう言っている。あなた方はキリストと共に復活させられてしまったんだから、

上にあるものを求めなさい。ここでは、キリストが神の右の座に着いておられます。

上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれなないようにしなさい。あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているの

です。<sup>4</sup>あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。

あなた方は今までのような地上での様々な生き方はもう縁がないんだと。

<sup>7</sup>あなたがたも、以前このようになごとの中にいたときには、それに従って歩んでいました。<sup>8</sup>今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。<sup>9</sup>互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、<sup>10</sup>造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。<sup>11</sup>そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのものうちにおられるのです。<sup>12</sup>あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。<sup>13</sup>互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。<sup>14</sup>これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。

ここに書かれている「憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容」、これだけでも十分に愛だと思えますのに、ここに更に愛を身につけなさいと。

愛は、すべてを完成させるきずなです。<sup>15</sup>また、キリストの平和があなたがたの心を

支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。<sup>16</sup>キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。<sup>17</sup>そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。」(コロサイ3:1-17)

要は、ここに言われていることは、私たちの生活の根本はキリストだと。キリストから発して、そして神に帰っていく。それ以外にないよと。だから、それが日常生活であれ、日常の職業的な生活であれ、様々な業をなすにしても、すべて主にあって、キリストにあってなしなさい。そして栄光を神に帰しなさい。すべてを神の業によって、キリストの名によってなしなさいと。

### いつのまにかキリストに感染

それから最後に、「フィリピの信徒への手紙」3章。(フィリピ3:17-21)

「<sup>17</sup>兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。<sup>18</sup>何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。<sup>19</sup>彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、

この世のことしか考えていません。<sup>20</sup>しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。

<sup>21</sup>キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい<sup>からだ</sup>体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」(フィリピ3:17-21)

これが望みなんです。これが希望なんです。これは神の約束ですから。人の約束なら頼りないけれども、神さまがここまで硬く約束してくださっている。もうこれは絶対にまちがいない。それをおかたく信ずるのは、イエスさまは、神さまはウソつきではない。神さまは本ものだもの。神さまがウソつきだったら、夢も希望もないですよ。でも、神さまは本当なるお方だ。だから、

「そのお方と一つにされて、希望の中に生きなさい。光の中に生きなさい、応援しているよ」と。向こうが近づけば近づくほど、よく、「お迎えがくる」という言い方をしますね、日本人は。「早くお迎えが来てほしい」とか。これは喜んで言っているからではなくて、この世が苦しいから言っている。そうではなくて、

「キリストの愛は素晴らしい。だから、私は輝いて生きるんです」

という、そういう生き方を、皆さんお一人お一人が本当に実生活の中の様々な場面で——いろんなお仕事をなさっています——どんな場におられる方も、同じように光かがやいている。みんな素晴らしい。本当にキリストは本ものだと。そうやって、周囲の人たちが、「参った、参った！」と言っ

「いや、参っただけじゃない。いつのまにかあなたに感染したよ。あなたからキリストが私の中に伝わってきたよ。感謝するよ」

なんて言われるように。決して、説教したり、折伏しやくふくしたり、それは要りません。私たちが聖言せいごんとありに生きていると、周りの人は不思議がって、

「あなたはなぜそんな元気のの？」

「うん、秘密があるからや」

「秘密って何？」

「わがうちなるキリストだよ」

「見えへんではないか」

「神さまが見えたら、たまるかいな。愛は見えないだろ、希望も見えない。すべて見えない。空気も見えない。見えないものが永遠なんだ。見えるものはやがて消えゆく。そういうことが、私はいつのまにか身体の中にしみ込んでしまった。教えていただいた。やっぱりキリストは凄いなあとと思って、そうやって生きているだけよ。神のやすらぎがある。「金を出したらいいの？」 いや、こんなに罪があったら、あかんやろ」

「金で買えるものではない。何でも金で買えると思ったら大間違い。金では買えない本当の宝物、しかも万人にただで無条件に、無代価だよ」

「えっ、こんな私みたいなこんな悪いやつに？」

「そうや、悪い奴ほど好きなんや、キリストは。悪い奴が本当に喜びに変わる姿を見るのを望んでいる。一緒に教会へ行こうか？」

なんて言ってる（笑）。とにかく、皆さんが喜んで嬉々として生きている姿が素晴らしい。それを神さまは望んでいらっしやる。それが今日の私の申し上げたいことです。では、終わりにします。

### 祈り

それでは短く祈ります。主イエス・キリストさま、この会場にあなたがご臨在くださって、ここへ招いてくださった方々、お一人お一人の中にいつのまにか知らない間に沁みとおおり、聖言みことばをいただくと共に、言葉の中にしつかりと受けさせてくださったことを感謝いたします。

私たちの人生の目的は、本当に神さまがこんなに恵み深く、憐れみ深く、ふさわしくない者を神の子としてくださった。永遠の生命を受け継ぐ者としてくださった。喜びにあふれて輝いて生きようと励ましてくださったっている、そういうお方を知ること。

「永遠の生命とは唯一の神であり給うあなたと、あなたから遣つかわされたキリストを知ることにあります」

と、ヨハネ伝17章でイエスは祈ってくださいいましたが、本当にそれなのに、私たちは長い間あなたを知りませんでしたけれども、あなたのご用にめざめ、あなたが早くから私たちを救い上げようと、心を尽くしてくださいだったことを知ることができました。

どうか今度は、私たちが小さなキリストとされて、周りの人々を助けあげ、救い上げ、喜びと希望に輝かしい人生を生きるようにと、私たちをお用いください。必ずあなたはそうなさってください、あなたの御思いを、それを実現してくださいることを信じます。どうぞ、それぞれの方々の心にかかっている愛する方々、担っている方々の中に、あなたの御力と生命と喜びが溢れますように、御働

きくださいますように、希い奉ります。  
この讚美と感謝と祈りを、お集まりの皆さま方の熱い祈りと共に、尊き主イエス・キリストの御名を通して御前にお献げいたします。アーメン。